

おっさん、異世界で ドラゴン^を育てる。

Ossan isekai de
Doragon wo sodateru

2



鈴木 竜一

illustration: ヨシノリョウ

?????

全てが謎に
包まれた男。

フライア・ベルナール

颯太が王都で出会ったミステリアスな美女。

ナインレウス

フードの男に付き従う
竜人族の少女。

キルカジルカ

お転婆な竜人族の女の子。
アンジェリカに懐いている。

アンジェリカ・
マーズナー

マーズナー・ファームのお嬢様。
意外と面倒見がいい。

ブリギッテ・
サウアーズ

竜を専門に診る美人な医者。
何かと颯太のサポートを
してくれる。

キャロル・
リンスウッド

颯太がお世話になる牧場で
働く健気な少女。
ドラゴンが大好き。

主な登場人物

たか みね そう た
高峰颯太

異世界に迷い込んできた
本作の主人公。ひよんなこと
から手に入れた竜と話せる
能力を活かし、ドラゴン育成
牧場のオーナーとなる。

「準備のほどは？」

真紅の唇が滑らかに動いて言葉を紡ぐ。

薄暗いハルヴァ王都の路地裏。

発光石が埋め込まれた街灯。

その人工的で頼りない光の下に、二人の女が立っていた。

一人は蜂蜜色の長髪に、藍色の瞳。その左側には泣きぼくろがひとつ。全身は夜の闇に同化するほどの黒いドレスに包まれている。

もう一人は十歳程度の、女というより女の子といった外見で、長髪の女のスカートをがっしりと掴んで放そうとしない。オレンジ色のセミロングヘア。色白で、どこか造られたような表情は、見ている者に儼げな印象を抱かせる。頭には牡鹿みたいな角があり、腰のすぐ下からは鱗のついた尻尾が生えている。

少女の外見の異様さを除けば、仲睦まじい姉妹にしか見えない。

「仰せの通り、滞りなく進んでおります」

その時、どこからか低い声が聞こえ、女を取り囲むように複数の影が並ぶ。

影の正体はすべて男であった。

丸太のように太い腕と凶悪な人相。

そんな彼らが目の前にいる線の細い女性に敬語を使い、小間使い同然に扱われても文句ひとつ言わずにいる。このことから、黒いドレスの女は相当な力を持った人物であることが窺えた。

男の一人は報告を続ける。

「次の標的であるレインズ・ファーム周辺への人員配置は終了しています」

「順調に進んでいるようね」

「はい……ただ、気がかりなことが」

満足そうに頷いた女に、別の男が言った。

「何かしら？」

「それが、例のソラン王国の件で少しトラブルが」

「ソラン？ ああ、ブランドン・ピースレイクの件ね」

女がため息交じりに言う。

ソラン王国の元国王であるブランドンとは面識があったが、あの醜悪な面はできる限り思い出しにくかった。

「指示通りうちの者をブランドンの配下として潜り込ませ、その動向を探っていたのですが……厄介な事態になりました」

「厄介な事態？」

眉をひそめ、女は男の言葉を繰り返す。

彼女は最初、《歌竜》ノエルバッツを味方に引き入れたブランドンがソランの守備隊を制圧して玉座に座り直したことで、調子に乗って手が負えなくなったとか、そういった類の報告だと思っていた。しかし男の様子から察するに、どうも違うようだ。

「ブランドン・ピースレイクが死にました。ブランドンに脅されていたノエルバッツが彼を裏切り、ハルヴァ側についたのです」

女は眉間にしわを寄せる。

「とことん使えない男ね。私たちがあそくまでお膳立てしてあげたというのに……」

呆れたように言った直後、女は顎に手を添えて言葉を続けた。

「それにしても妙ね……ノエルバッツの性格を考慮したら、裏切る可能性はほぼないと踏んでいたのだけだ」

「潜り込んでいた者の話では、ハルヴァ軍にドラゴンと意思疎通できる男がいて、その男がノエルバッツを説得したとのことだ」

「ドラゴンと意思疎通を？ まさか、竜の言葉がわかるとでも……」

女は何をバカなと鼻で笑ったが、すぐに真剣な顔になった。

「どうかされましたか？」

「いえ……ただ、気になるわね。その男のこと」

「調べますか？」

「ええ、そうして頂戴。あと、調査の過程でハルヴァ竜騎士団に何か動きがあった場合は、逐一こちらへ報告すること」

「はっ！」

女から指示を受けた男は、軽く頭を下げて一歩後退する。

周りの男たちの視線はすべて女に注がれている。次の指示を待っているのだ。

女は男たちに手際よく命令を下す。

「あなたたちは最後の準備が整うまで、これまで通りに街を訪れた旅の商人として過ごしなさい。残りの者は例の物をハルヴァ城内へばれずに送り込むこと。そして、舞踏会の当日になったら……所定の場所へ戻るように。よろしいわね？」

男たちは小さく頷き、その場をあとにした。

「これで手配はほぼ終わりね」

女はそうつぶやいたあと、まるで幼子をあやす母親のごとき慈愛に満ちた微笑みを浮かべて少女の頬を撫でる。

少女が不安げな顔で女を見上げた。

その表情に気づいた女は、少女を安心させるために、子守唄を歌うような優しい声音で語りか

ける。

「あら、心配？ 平気よ。多少のトラブルは付き物だから」

そして力強く言い切った。

「絶対に成功する。失敗なんてあり得ないわ」

最後にニコリと微笑むと、少女はようやく安心したのか、ゆっくりと首を縦に振った。女は顔を上げる。

その視線の先にあるのは、王都にたたずむハルヴァ城。

込み上げる笑いを押し殺し、女は少女を連れて夜の闇へと消えていった。



「よし、と……こんなところか」

穏やかな午後の陽射しを浴びながら、高峰颯太は息を吐く。

年間を通して温暖な気候であるハルヴァは、今日も絶好の仕事日和であった。

ソラン王国の一件から一週間。牧場の仕事がつっかり板についてきた颯太は、手際よくリンスウッド・ファーム竜舎の清掃を終えて一息ついた。

「ちよっと前まで……こんなのにびりした時間を過ごすなんて考えられなかったなあ……」

思い出すのは地球でのサラリーマン時代。

時間とノルマに追われ、明けても暮れても仕事だらけだった毎日。そんな日々を終止符を打った
め退職届を用意したその日の朝に、颯太は異世界の見知らぬ森に飛ばされた。

森の中をさまよっていた颯太は、そこで竜王レグジートと偶然出会い、彼からドラゴンと話せる
ようになる秘宝、竜の言葉^{こゝろご}を授かる。そして《銀竜》メアングルドを潰れかけたこのリンス
ウッド・ファームに導き、その功績と人柄を認められて牧場の新しいオーナーに就任したのだった。
ちなみに、本来オーナー職に就くはずである牧場の一人娘、キャロル・リンスウッドは現在竜舎
にいない。

いつもなら颯太と一緒に作業をしているのだが、今日は家事に専念するという事で、竜舎での
仕事は颯太に一任したのである。

「さて、もうひと仕事しますか」

サラリーマン時代ではあり得ないほどの意欲で仕事に取り組む颯太。それくらい、この世界での
ドラゴン育成牧場のオーナーという職を気に入っているし、やりがいを感じていた。

「だいたい慣れてきたみたいだな」

そんな颯太の頑張り^{ねまじ}を労ったのは、赤い鱗が特徴的な陸戦型^{りくせんがた}ドラゴンのイリウスだった。

「おかげさまでね」

竜舎で寝そべるイリウスの言葉に軽く返す颯太。

たしかに肉体的な疲労はあるが、精神的にはとても充実しているため、苦になることはなかった。
運動をロクにせず取引先におべっかばかり使っていた日々^{ひび}に比べたら、遥かに健康的な生活と言え
るだろう。

その後もしばらくイリウスとたわいない会話をしていると、どこからともなく声が聞こえてきた。
声は徐々にボリュームを増し、やがてそれがただの声ではなく歌である^{うた}とわかる。

「お？」

「ん？」

その歌によって会話は中断され、一人と一匹の視線は同時に同じ方向へ向けられる。

「これは……」

自然と、颯太の足は一步前に出ている。

心が洗われるような透き通る歌声。顔を見なくても、誰が歌っているかわかる。先日新しく仲間
に加わったハルヴァが誇る竜人族^{りゅうじゅうぞく}、ノエルこと歌竜ノエルバツツだ。

「あいつもここが気に入ったみたいだな」

「よかったよ」

颯太とイリウスは顔を見合わせて同時に笑った。

それから、颯太は外に出てノエルの様子を窺う。

人間の姿に変身しているノエルは積み上げられた藁^{わら}の上で目を閉じ、首を小さく左右に振りなが

ら気持ちよさそうに歌っていた。隣には同じく人間形態となって目を閉じて歌声に聴き入るもう一匹の竜人族、メアこと銀竜メア・ガルドの姿もある。その光景は仲のいい姉妹のようにしか見えない。

颯太に続いて外に出たイリウスがノエルたちを見て、ポツリとつぶやく。

「まるで本物の姉妹だな……って、あの二匹は実際姉妹なのか」

「前にメアから聞いたが、母竜は違うらしいぞ」

「じゃあ腹違いの姉妹ってヤツか」

イリウスの言葉に頷いたあと、颯太は過去を思い返す。

ソランの元国王であるブランドン・ピースレイクに騙され、一時は敵対していた二匹。関係の修復はもはや不可能かと思われたが、颯太の説得に応じたことでノエルはブランドンのもとを離れ、リンスウッド・ファームに身を寄せることになったのである。そのため、今では一緒に暮らしていた頃と変わらぬ関係に戻れたのだ。

ノエルとメアの仲睦まじい様子を確認したあと、颯太は手にしていたピッチフォークを道具置き場に戻した。

イリウスがそれを見て不思議そうにたずねる。

「ん？ どうした？ 今日はもう終わりか？」

「牧場内の仕事は、な。このあと、城へ行くんだよ。出国申請をしようと思ってね」

「出国？ 旅行にでも行くのか？」

「俺じゃないよ……ノエルが前に住んでいた山近くの村へ行けるようにするのさ」

かつてノエルが親しくしていた人間たちの住む村。そこで疫病が流行ったため、村人たちは治療を受けに一時的に近くの大きな町へ移住していた。しかし今では大勢が快復し、元の村に戻っているという情報を、颯太は竜騎士団を経由して聞いていた。

旧ソラン城でノエルを説得する際、颯太は「またみんなに会わせる」と約束していた。その約束を果たすべく、村人たちとの再会の場を用意したいと考えたのである。

颯太の言葉に、イリウスは納得したように頷く。

「ノエルの出国許可ってわけか……」

「ただ、やっぱり竜人族となると勝手が違うかな」

一匹で通常種のドラゴン三十四分の戦力に相当するとされる竜人族を、国家がそう易々と国外に出すとは思えない。食い下がるつもりではあるが、出国の許可が下りる確率は、五分五分と予想していた。

「まあ、別に問題はねえと思うぜ。この国には以前から一匹の竜人族がいるが、そいつも牧場関係者と一緒にちよいちよい国外へ行っているみたいだし」

イリウスの話を聞き、少し望みを持つ。

ただ、それとは別のことに颯太は関心を抱いた。

「ハルヴァの竜人族か……その子にも会ってみたいな」

「あいつは気が強えからあんまオススメしないぜ」

イリウスはそう言うが、颯太の気持ちは変わらない。

銀竜メアンガルドと歌竜ノエルバツツ。

この二匹が加わる以前からハルヴァにいるというもう一匹の竜人族。まだ顔すら見たことないので、颯太としては会うのが楽しみであつた。

「メアたちと仲良くやればいいけどな」

メアやノエルがその竜人族と良好な関係を築ければ、きつとどの国にも負けない竜騎士団になるだろう。

未来のハルヴァ竜騎士団に思いを馳せながら、颯太は外出の準備を整えるため一旦家に戻った。



リンスウッド・ファームから出ると、舗装ほそうされていない土の道が、王都に向かって真つすぐ延びている。

牧歌的な雰囲気たじろの漂う道を歩いていくうちに、少しずつ人や建物の数が増え、数分後、王都南端部の商業区に到着した。

前後左右、どこに目を向けても屋台が並んでいるが、市場はピークの時間帯を過ぎていたため、今はまつたりとした空気が流れていた。朝から働いていた商人たちも、午後の商売に向けて腹ごしらえをしている。

「しかし……こうして改めて見ると、亜人も結構な数があるな」

エルフや獣人族けうじんぞうなどなど。

地球ではファンタジーとされていた生き物たちが、この世界では当たり前のように暮らしている。最初こそ驚いたが、今ではもうすっかり慣れてしまった。

街の様子に目をやりながら歩いていた颯太は、あることに気づく。

「……妙に兵士が多いな」

ハルヴァ竜騎士団と思われる多くの兵士たちが街にいる。

「午前中に何か騒ぎでもあつたのかな」

とはいえ、この時は特に深刻に考えることなく歩き続け、城門前までたどり着いた。

「あ、ちょっといいですか？」

入城許可を求めるため、颯太は近くの門番へ声をかけた。

「おや？ リンスウッドのオーナーさんじゃないですか」

その兵士には見覚えがあつた。彼はソラン王国でノエルによる石化の歌を聴き、石にされていたマヒーリス分団の兵士だ。

兵士は颯太に頭を下げる。

「先日はどうもありがとうございました。あなたのおかげで我らは今日もこうして元気に過ごせていますよ」

「いや、そんな……」

ストレートに感謝の気持ちをぶつけられると、やっぱり気恥ずかしくなる。照れくさを振り払い、颯太は早速本題へ移った。

「ところで、ハドリーさんはいますか？」

「申し訳ありません。リンスウッド分団長でしたら、今朝早くから西方領との国境近辺へ警邏任務に出ています。間もなく戻られると思いますが……」

ハドリーが今日の午前中は王都不在であることは、事前に本人から聞いていた。そのため昼頃に城で合流するという話になっていたが、まだ戻っていないようだ。

出直そうと思い、その旨を兵士に伝えようとした時だった。

「どうかしたのか？」

颯太の方に歩み寄り、話しかけてくる一人の男。

長い金髪が特徴的なその男は、ハルヴァ竜騎士団マヒース分団をまとめるジェイク・マヒースであった。

「ジェイクさん！」

「おおっ！ 誰かと思ったらソータだったか！ こんなところでどうした？」

おおらかでフレンドリーな態度のジェイクと固く握手を交わしたところで、颯太は彼なら助けになってくれるかもしれないと思い、口を開く。

「今日はお願いがあつて来たんです」

「お願い？ なんだ？」

「実は、竜人族の出国手続きについての申請方法を教えていただきたくて」

「竜人族の出国手続き……」

途端に、ジェイクの顔が曇った。

「え？ な、何か俺、変なことを言いました？」

「いや、何も変じゃない。ただ……タイミングが悪かったただけだ」

「タイミング？」

豹変したジェイクの態度を見るに、どうやら竜人族の出国手続きをするにはあまりよろしくない事態が発生しているようだ。

「何かあったんですか？」

「……ここじゃちょっと話せないな。中に入ろう」

外では語りにくい内容ということは、機密に関わることだろうか。さらに話の雲行きが怪しくなってきた。

城内へ足を踏み入れると、以前訪れた時と変わらず、メイドさんや使用人たちが忙しく働いていた。慌ただしいが、別段変わった様子はない。

ジェイクと並んで歩く間、颯太は城へ来た経緯について簡単に説明する。ノエルの事情はジェイクにも伝わっているようで、「それは叶えてやりたいよな」と返してくれた。

ジェイクに連れられ、使用されていない部屋にやつてくる。しばらく待機するよう言われて、待つことおよそ三十分。

「すまないな、待たせてしまった」

謝りながらジェイクが入室し、颯太と対面の椅子に腰を下ろした。

「プロドリック大臣から部屋を借りる了承を得てきた。ハドリーが帰ってくるまで、竜人族の出国の詳細について説明するが……これから話すことは絶対に口外しないでくれよ。同じ牧場に勤める仲間であつても極力避けてくれ。混乱を防ぐため、オーナーである君の胸に留めておいてほしいんだ」

「わかりました」

颯太が頷いても、ジェイクはさらに「絶対だぞ」と念を押す。やはり相当際どい内容のようだ。

「まず先に言うておくが……すまない、竜人族の出国は現在制限されていて、しばらくは出られそうにない」

「そうですか……」

ジェイクの態度から、なんとなく断られるかもしれないと予想を立てていたのも、それほど驚かない。ただ、ノエルは悲しむだろう。こうした事態を想定し、颯太はノエルに出国許可の件については話しておらず、おかげで彼女が落ち込まずに済んだのは不幸中の幸いと言えた。

ただ、ノエルとの約束をずっと果たせないままでは困る。このまま大人しく帰るわけにはいかない。

「一体、何が起きたっていうんです？」

颯太の問いかけに、ジェイクは黙り込んだまま。

やがて口を開いたが、まるで唇に十キロ級の重りでもぶら下げてあるみたいに動きが遅い。

「まあ……おまえはプロドリック大臣にも認められたオーナーだし、大臣が話しても大丈夫だと言っているのだからいいだろう。いずれは知られてしまうことだしな。遅いか早いかの違いだ」

自分自身に言い聞かせるようにつぶやくと、改めてジェイクは颯太に視線を向ける。

「実は、国内にいるドラゴンにトラブルが生じた」

「トラブル？」

国内に約二百匹いる戦闘用ドラゴン。どうやら出国制限の原因は、そのドラゴンたちにあるらしい。

「昨日の夜から、複数の牧場で合計六匹のドラゴンが行方不明になっているんだ」

「えっ！」

ドリック大臣もな。何せ、短期間での連続失踪は過去に例を見ない事態だ。こちらの想像の遥か上の答えが潜んでいたとしてもおかしくはない」

たしかにゼロではないかもしれないが、可能性は限りなく低いだろうというのが颯太の率直な感想だった。

それはソラン王国での経験から言えることだ。

ソラン王国の戦闘に参加したドラゴンたちは皆、ハルヴァを守るために戦っていた。背中に乗せた竜騎士たちを信頼し、数量で勝るブランドン軍を撤退寸前にまで追い込んだのである。

「ドラゴンが単発でいなくなる事案は過去にもいくつかあったが、大体はただの脱走だったし、多くは自分で戻ってきた。しかし、今回の同時多発的に発生した失踪事件は……ソランでの一件も含めてキナ臭い感じがしてな」

「そうですか……」

ブランドンにノエルの情報を与えたフェリガンという謎の男。

今起きているドラゴン失踪事件の鍵は、その男にありそうだとジェイクは睨んでいる。それには一理あると颯太も考え直した。

「我々竜騎士団は現在、このフェリガンという男の素性と居場所を調べているが、まだこれといった手がかりは掴めていない」

「なんだか不気味ですね……」

「まったくだ……それで、今度は俺からお願がある」

ジェイクの言葉を聞いて、颯太はそれがドラゴン絡みの依頼ではないかと予想した。竜の言葉霊を持ち、ドラゴンと会話ができる颯太は、ハルヴァの切り札ともいべき存在だ。

「今回の連続ドラゴン失踪事件……君にも調査に力を貸してもらいたい」

「もちろん。俺でよければ協力を惜しみませんよ」

ジェイクが頭を下げると、颯太は即答した。

先日起きたソランでの事件は竜の言葉の力のおかげで解決でき、おまけにノエルバツをハルヴァへ引き入れることができた。今起きている連続ドラゴン失踪事件についても、きつと自分は役に立てるだろうと考えたのである。

颯太の返答を聞いて、顔をほころばせるジェイク。

「助かるよ。こちらの見立て通りフェリガンという男が事件に一枚噛んでいるとすれば、向こうの戦力にもドラゴンがいる可能性もあるからな」

颯太の協力を得られて安心したようだ。

その時、ふと気になったことを颯太はたずねる。

「そういえばうちはなんの被害もありませんでしたが、他に無事な牧場はあるんですか？」

「被害が確認されていないのはマーズナーとリンスウッドのふたつだ……まあ、リンスウッドに今いる竜はイリウスを除くと竜人族二匹だけだし、ドラゴンの数が多いマーズナーは常時警戒態勢だ

から、侵入しづらいというものもあるのだろうか」

「マーズナー……」

ジェイクの口からマーズナー・ファームの名が出た時、颯太はソラン王国でハドリーから聞かされた一言を思い出した。

『マーズナーには気をつけろ』

オーナーであるミラルダ・マーズナーはかなり癖のある人物だったと聞いている。現在は一線を退いて後継者にオーナーの座を譲ったそうだが、そのような男が後継ぎに選んだ人物となると、相当手強そうだ。

サラリーマン時代も、厄介な取引相手とは何度もやり合ってきた。理不尽な要求に苦しみ、何度も何度も関係者に頭を下げた。

苦い過去の記憶を思い出し、表情が暗くなる颯太。

彼の異変を察知して、ジェイクは眉をひそめてたずねた。

「どうかしたか？」

颯太は慌てて嫌な思い出を振り払い、前オーナーについての詳細な情報を聞く。

「ジェイクさん……ミラルダ・マーズナーはどのような人物なんですか？」

「ミラルダ——おまえもあの男の名前くらいは知っていたか」

颯太の質問を受け、ジェイクはゆっくりと語り始める。

「もともとはハルヴァでも指折りの豪商だった男だ……もつとも、商売の中身はお世辞にもクリーンとは呼べなかったが」

「かなり悪どい人物なんですネ」

「悪どいというか……異端児って表現がしっくり来るわな、あの人は」

頭をボリボリとかきながら、ジェイクはため息交じりで言葉を続ける。

「ともかく、ミラルダはその後、商人時代に貯め込んだ私財を投入して牧場経営に参入した。奴がマーズナー・ファームを開いたからこそ、今日のハルヴァ竜騎士団があるともいえる」

「と、言うത്？」

「以前は国内にもっと多くのドラゴン育成牧場があったんだ。しかし……ミラルダは豊富な資金力を武器に事業を拡大していき、その結果、大半が廃業に追い込まれていった」

「は、廃業……」

ミラルダはオーナーとしても、相当な手腕の持ち主だったらしい。

「違法スレスレで危ういところもあったが、奴が仕切るようになってからドラゴンの数とクオリティが向上したというのもまた事実。正直、あいつのやり方は好かないが、お偉いさん方からの評価は低くなかったんだ」

そう語るジェイクの顔は冴えなかった。

「実は……そのマーズナー・ファームから、リンスウッド・ファームへある提案がされている」

「ある提案？」

「うむ。それは——リンスウッド・ファームの人間とドラゴンをマーズナー・ファームへ一時的に避難させるといふものだ」

「避難……ですか」

それはつまり、今後狙われるかもしれないリンスウッド・ファームを助けるということ。マーズナー側の狙いが読めない。

颯太が困惑していると、ジェイクはさらに言葉を続ける。

「今朝、向こうの新オーナーが城へやってきてそう提案したんだ。事後報告になって申し訳ないが、プロドリック大臣がこれを承したため、マーズナーの人間が夕方にリンスウッド・ファームを訪ねることになっている」

「え？　うちへ？」

「そうだ……竜騎士団としても、リンスウッドとマーズナーにそれぞれ戦力を割くより、数の少ないリンスウッドの面々がマーズナーに避難してくれたら何かあった際に守りやすい。戦力を集中させることができるからな」

それについては頷けた。

標的を分散させるのではなく、一点に集めた方が充実した戦力で確実に守ることができるだろう。そのため、提案について文句はない。

颯太がマーズナーのオーナーの立場であつたとしても、同じような提案をしたはずだ。

「前任のミラルダ・マーズナーも一筋縄ではいかない人物だったが、新しいオーナーについてはまだまだ未知数でどんな人間なのか……俺も関係者として今朝直接会つたが、人物像を掴みかねている……と、忘れるところだつた。おまえにこいつを渡しておかないと」

鋭い眼光でそう言つて、ジェイクは懐^{ふところ}から何かを取り出す。見たところ封筒のようだ。

「それは？」

「おまえ宛ての招待状だ。三週間後にここハルヴァ城で行われる舞踏会の、な」

「舞踏会……あ」

すっかり忘れていた。

ソラン王国で一緒に戦つたエレヌが、別れ際にそのようなイベントがあると言つていた。エレヌ自身も、新生ソラン王国の女王として参加するらしい。

招待状の入った封筒を受け取つた颯太だが、内心では少し戸惑つていた。

エレヌや仲間のブリギッテはソランでの活躍から参加する資格があると言つてくれたが、まだまだ駆け出しである自分は場違いではないかという思いがある。

颯太の気持ちを見抜いたのか、ジェイクはやれやれといった調子で口を開いた。

「まあ、そう気負うなよ。おまえの舞踏会参加には俺やハドリーだけじゃなく、プロドリック大臣も賛成しているんだぜ？」

そのまま椅子から立ち上がり、顔を強張らせた颯太の肩を叩いて激励する。

「あ、ありがとうございます」

「礼なんていらねえさ……さて、とりあえず俺の話はここまでだ。あとはマーズナーの新しいオーナーと打ち合わせをしてくれ。あっちも舞踏会に参加するみたいだから、いろいろ話を聞いてみるのもいいかもな」

「わかりました」

激励を受けて少し気分が軽くなった颯太はそう返事をする。

颯太の変化はジェイクにも伝わったらしく、彼はフツと笑みを漏らした。

「……少しは肩の力が抜けたようだな。それでいいんだよ。城門の前に馬車を待機させてあるんで、それに乗って牧場へ戻るといい。あと、失踪事件に関しては、おまえの力が必要だと思った時に声をかけるからそのつもりでいてくれ」

「はい」

ジェイクの心遣いに感謝しつつ、颯太はマーズナー・ファームの新オーナーとの初顔合わせに向けて気を引き締めるのだった。



颯太は城門前に待機していた豪華な馬車へ乗り込み、王都の中央通りを通過してリンスウッド・ファームへの帰路を順調に進んでいたのだが、到着寸前で馬車が停まってしまった。

「どうかしましたか？」

たずねられた御者は、困ったように首を捻^{ひね}って答える。

「それが……牧場の前にすでに別の馬車が停まっていて」

「馬車が？」

颯太は窓から外の様子を窺う。

たしかに、リンスウッド・ファームの正門の前には見知らぬ馬車が停まっていた。颯太がハルヴァ城から乗ってきた馬車にも引けを取らないほどの立派さだ。

一体どここの馬車だろうと疑問に思っていると、御者が驚くべき事実を口にした。

「見覚えがあると思ったら……あれはマーズナー家が所有している馬車ですね」

「え！」

現在時刻は昼過ぎ。

ジェイクは夕方に訪れると言っていたが、どうやらすでにマーズナーの関係者はリンスウッド・ファームに到着していたようだ。

「こうしちゃいられない！ こままで大丈夫です！ ありがとうございます！」

国内最大手であり、業界の先輩でもあるマーズナーのオーナーを待たせるわけにはいかない。

颯太は馬車から飛び下りて全力疾走。

マーズナーの馬車に駆け寄ると、牧場の正面口に関係者と思われる人物が五人立っているのが見える。

その中でも一際目立つのが、ライトブラウンの髪をした女性だ。

遠目にも、その女性だけ明らかに周りの人々とは纏うオーラが違う。

颯太が大慌てで近づくと、五人の視線が一斉に颯太へ向けられる。全員が若い女性だった。

「あら？ どちら様？」

腕を組んで真ん中に立っている、別格のオーラを放つ女性が最初にそう言った。

聞き惚れてしまうほどの美しい声。近くで見ると、まだ顔立ちには幼さが残っている。成人女性だと思っていたが、年齢はキャロルよりひとつかふたつほど上くらいか。

特徴的な縦ロールに切れ長の目。素人目でも高価であるとわかる美しい装飾が施されたドレス調の服を身につけている。周りにいる四人は服装からして、この少女に仕えるメイドのようだ。

「え、えっと……マーズナー・ファームの方ですよ？」

颯太がたずねると、縦ロールの少女は少し間を置いてから口を開く。

「……もしかして、あなたがこの新しいオーナーさん？」

「は、はい。高峰颯太と申します」

「そうでしたのね。申し遅れましたが、わたくしはマーズナー・ファームの新しいオーナーとなり

ました、アンジェリカ・マーズナーと申します」

「ま、マーズナーのオーナー……！」

心のどこかでもしかしたらそうではないかと予想はしていたが、こうしてハッキリと告げられてもすぐには実感が湧かなかった。

性格に難があったとはいえ、敏腕だったというマーズナーの前オーナーがこんなに若い少女を後継ぎに選んだとは。リンスウッドの場合は、キャロルが若すぎるという理由で颯太がオーナーを任されているというのに。

それと、もうひとつ気になる点があった。

「マーズナーということは……あなたはミラルダ・マーズナーの——」

「娘ですわ」

案の定、アンジェリカは前オーナーであるミラルダの娘だった。

たしかに、アンジェリカの服装や言葉遣いはいかにも「お嬢様」という感じがする。若くして牧場の代表者となったみたいだが、同じ年頃のキャロルとは事情が異なっていそうだ。

アンジェリカは呆然としている颯太を無視し、まるで品定めでもするかのように颯太の全身を見回す。それが終わると、今度は「なるほど」とつぶやいて目を閉じ、何かを考え始めた。

一連の行動理由がわからず困惑する颯太に構わず、少女は目を開いて話した。

「随分と面白い能力をお持ちのようですね。なんでも、ドラゴンと会話ができるのだとか」



「え？ ……あ、ああ、竜の言葉のことですわね」

「短期間で二匹の竜人族をリンスウッド・ファームに加えた……同業者からすれば強大なライバルの登場に焦りを隠せませんわ」

「そ、そんな……自分なんてまだまだ青二才ですよ」

大きく年が離れているとはいえ、相手は自分よりも遥か格上の存在だ。新米オーナーという点では同じだが、牧場としての規模は圧倒的にマーズナーの方が大きいのだから。そのため年下であっても、颯太は自然とアンジェリカに対して敬語を使っていた。

しかし、当のアンジェリカは颯太の口調が気に入らないみたいで、注文をつけてくる。

「そのようにかしこまらなくても結構ですわ。普段と同じようにお話しなさい」

「は、はあ……わかり……わかった」

どうやら彼女は特別扱いが嫌らしい。

その時、牧場から一匹の竜が近づいてくるのが目に入る。リンスウッド・ファームのドラゴン、イリウスだ。背中には人間の姿に変身している竜人族のメアとノエルが乗っている。三匹で敷地内を散歩していたのだろうか。

まず、イリウスが声をかけてくる。

「よお、帰ったか……ん？ もしかして……マーズナーのお嬢ちゃんか？」

続いて、颯太を発見してメアとノエルがイリウスの背中から飛び下りた。

「待っていたぞ、ソータ！ さあ、我らと遊ぼう！」

「あ、で、でも、お客さんみたいですよ？」

二匹はてて、と颯太の方へ駆け寄ってきたが、アンジェリカを視界に捉えると急ブレーキ。
「どうした？」

颯太が首を傾げていると、メアとノエルはアンジェリカを避けるように大回りして颯太の背後に身を隠してしまう。

「お、おい、どうしたんだよ。ほら、あいさつくらいしろって」

ズボンを掴んで放さない二匹に困り果てる颯太。アンジェリカが愛想よく「こんにちは」とあいさつをしても、顔を隠して断固無視。

「す、すまない。いつもはここまで聞きわけがない子たちじゃないんだ」

「構いせんわ。ドラゴンだって、人見知りくらいしますもの」

さすがは大手マーズナー・ファームの後継者、これくらいでは動じないか、と颯太は感心する。

颯太から離れようとしないうちに二匹の様子を見て、イリウスはニヤニヤしながら「まるで初めて父親の再婚相手を見る娘たちって構図だな」と茶化して竜舎に帰っていった。

「あ、そうですね。ちょっと待っていてくださいまし」

突然アンジェリカは馬車に引込んで中から何かを取ってきて、メアたちに差し出した。

「これはお近づきの印ですわ」

彼女の小さな掌（のてのひら）の上にあつたのは、綺麗な包み紙に入った飴玉であつた。

「お口に合うかどうかわかりませんが……甘くておいしいですよ？」

「うー」

甘くておいしい——その言葉を耳にして目を輝かせて飛びつこうとしたメアとノエルだったが、ピタッと動きを止める。まるでシンクロしているようにまったく同じタイミングだった。

どうしたのかと眺めていたら、二匹はジッと颯太を見つめた。どうやら颯太の了承なしにもらつてはいけなうと思つたらしい。

「ありがたくもらつておけ」

颯太が言うと、メアたちは飴を受け取っておずおずとアンジェリカにお辞儀（じぎ）をした。

「どういたしまして」

しなやかな動作と穏やかな微笑（ほえ）みでそのお辞儀に応えるアンジェリカ。

メアとノエルは飴を口に入れると、感激したように顔をほころばせ、竜舎のある方向へ駆け出す。先に竜舎に戻ったイリウスに自慢しに行くみたいだ。

アンジェリカは二匹の後ろ姿を眺めながら、颯太に声をかける。

「よい信頼関係を築けているようですね」

「まあ、あいつらは素直でいい子だから、手がかからなくて助かっているよ。まあ、これも竜の言葉のおかげなんだけど」

「ご謙遜を。たとえ竜の言霊があるうと、短期間で竜人族の信頼を得たのはあなたの努力の賜物。ブロドリック大臣からも活躍ぶりを聞きましたが、ソラン王国の一件も含め、誰にでもできることではありませんわ」

柔和な笑みを浮かべ、アンジェリカが言った。その笑顔は、年相応の少女らしいものだった。なんだか、想像していた人物像とかけ離れている気がする。

ハドリーやジェイクの言葉から、ミラルダ・マーズナーという人間はかなりの偏屈者であると思っていて、後継者であるアンジェリカも相当な曲者だろうと颯太は警戒していた。

しかし、実際に会ってみるとその印象は真逆。

無邪気なメアたちを見て笑みを浮かべ、ライバルである颯太の能力を認め、彼の功績を称えた。緊張が解けた颯太は、素直に礼を述べる。

「ありがとう。天下のマーズナー・ファームのオーナーにそう言ってもらえるのは光栄だよ」

「どういたしまして……でも、安心しましたわ。あの様子なら、うちの竜人族の子とも仲良くやっていけそうですね」

アンジェリカの口から出た「うちの竜人族」という言葉。

以前よりハルヴァに味方しているという竜人族は、マーズナーの所属らしい。

その竜人族も、メアたちと同じく特殊な力を持っているはず。

颯太がマーズナーの竜人族についてもっと聞こうとした時、キャロルがやってきた。

「あ、おかえりなさい、ソータさ……ん……」

キャロルは颯太を見つけて笑顔になったが、その直後にアンジェリカを発見して目を見開き、これまで聞いたことのないボリュームで叫んだ。

「アンジェリカお姉ちゃん！」

「ちゃんと名前を覚えていてくれたのね——キャロル。何年振りかしら」

「……八年振りです」

アンジェリカとキャロル。

こうして見ると、やはりわずかにアンジェリカの方が年上のようなのだ。が、久しぶりに会ったせいか、二人の間に流れる空気はどことなくこちない。

颯太は不思議に思っつてこそりアンジェリカにたずねた。

「君とキャロルは昔の知り合いなのか？」

「ええ。幼い頃、わたくしはよくこのリンスウッド・ファームに来ていましたの」

「そ、そうなのか？」

「キャロルの父親であるフレデリックさんは、偏屈者で知られるわたくしの父が認めた数少ない人物の一人……そのこともあつてか、父はよくわたくしを連れてここを訪れていましたの。わたくしが十歳の時にダステニアへ留学してからは会う機会がなくなっていました」

「へえ、そんな関係だったのか」

「フレデリックさんと奥様が病で亡くなったという訃報を受け取ったあと、牧場の経営がうまくいっていないと耳にして心配していましたが……優秀な人材を見つけたようでひと安心ですね」
颯太とアンジェリカが何やらコソコソと話している様子が気に入らないのか、キャロルの二人を見る目つきは険しい。

「……ダステニアでの留学期間は終わったんですか？」

ジト目でたずねたキャロルに、アンジェリカはさらりと答える。

「ええ。近々ドラゴン生態学の修士論文の発表が控えているため一旦戻りますが、それが終わり次第、完全にハルヴァへ帰ってくる予定ですわ。在学中には童医の資格も取得しましたの」

「そ、それは凄いな……というか、わざわざ外国で勉強するのか」

アンジェリカの秀才ぶりに驚く颯太。

「ダステニアは医療大国って呼ばれるくらい医学のお勉強に力を入れている国なんだよ」

その時、いつの間にか颯太の背後に戻っていたイリウスが補足した。何気に、この世界の情報に詳しい。

ようやく事情を理解したキャロルが、ゆつくりとつぶやく。

「そ、それじゃあ……マーズナーの新オーナーは——」

「わたくしが正統後継者として務めますわ」

高らかに宣言するアンジェリカ。

一方、その発言を聞いたキャロルはなんとも言えない表情を浮かべる。

「アンジェリカお姉——アンジェリカさんがマーズナーの新しいオーナー……」

「別と呼び方はお姉ちゃんでもよろしいのに」

「そ、そういうわけには……なんだか子どもっぽいし……」

歯切れ悪く答えるキャロル。幼い頃から知っているアンジェリカが同業者になったことに対して、複雑な心境のようだ。

「さて、あいさつはこれくらいにして、本題に入りましょうか」

流れを変えるため、パン、と手を叩いてアンジェリカがそう告げた。その言葉に、颯太もハッと なって本来の目的を思い出す。

「そうだ。マーズナー・ファームへの移動について話し合うんだったな」

「ま、マーズナーへの移動？ どういうことですか、ソータさん」

状況を理解していないキャロルが颯太に詰め寄った。

颯太はキャロルを落ち着かせつつ、話の続きは家で仕切り直そうと提案する。

キャロルとアンジェリカが頷いたので、ひとまず屋内に移動することになった。

家に入るなり、キャロルが颯太とアンジェリカを問い詰める。

「で、さっきの話はどういうことなんですか？」

「まったく、お茶も出さないで……気が早すぎですわよ？」

キャロルの剣幕など意に介さず、アンジェリカは一緒に連れてきたメイド衆に向かって指をパチンと鳴らした。

すると、一人のメイドがどこからともなく陶器に似た材質のお洒落なティーポットを取り出し、これまた洒落た絵柄のティーカップに赤茶色の液体を注ぐ。紅茶のようなものだろうか。

「質問に答えてよ、お姉ちゃん！」

やや幼い口調で言うキャロルに、アンジェリカは澄まし顔で答える。

「あら、昔の調子が戻ってきたみたいね。そうやって怒っているのを見ると、あの時のことを思い出しますわ……そう、あれはまだあなたが六歳の時。夜中にトイレへ行けないからと寝ているわたくしを強引に起こした挙句——」

「わーっ！ わーっ！」

唐突な暴露話を阻止すべく、キャロルがアンジェリカの口を塞ごうとした。しかしアンジェリカはひらりとかわして話を続行する。姉妹のような微笑ましいやりとりだが、このままでは埒が明かない。

颯太は大きな声を出して二人の話を遮る。

「う、うん！ とりあえず話を戻していいかな？」

「よろしくてよ」

ひと通りキャロルをイジリ終えたアンジェリカは、満足したように着席。一方、キャロルは恥ず

かしい話を完全には阻止できず、涙目で着席。

「えっと……一から説明すると——」

颯太はハルヴァア城でジェイクから言われたことをキャロルに説明した。

連続ドラゴン失踪事件が発生したこと。

その事件にブランドン・ピースレイクに入れ知恵したとされるフェリガンという男が絡んでいる可能性があること。

そして、事件が解決するまで、竜騎士団が護衛をしやすいよう、ドラゴンを含むリンスウッド・ファームの関係者——颯太とキャロルを一時的にマーズナー・ファームへ避難させるということ。

それらを事細かに伝えた。

マーズナーへ身を寄せるという案を竜騎士団に持ちかけたのが、アンジェリカであることも告げておく。

「そ、そんなことが……」

話を聞き終え、呆然としたキャロルがそうつぶやいた。

マーズナーへの移動より、国内で起きている連続ドラゴン失踪事件の方がキャロルにとってショックだったようだ。

「とにかく、万が一のためにあなた方は我がマーズナー・ファームで保護させていただきますわ」お茶を飲み干したアンジェリカが立ち上がって言った。

颯太はまだ事態を処理しきれないキャロルの肩に手を添えて、優しく話しかける。

「さあ、準備をしよう。大丈夫、ドラゴン失踪の原因が判明したら、すぐ戻ってこられるさ」

「ソータさん……」

颯太の言葉を受け、キャロルの表情がやわらぐ。

「……………」

アンジェリカは口を挟むわけでもなく、颯太とキャロルの会話を静かに眺めていた。

「アンジェリカ、すぐに支度を整えるから、ちょっと待ってもらえないか。メアたちにも事情を説明してくるから」

颯太が言うと、アンジェリカは頷いて椅子に座り直す。

「でしたら、ここでもう一杯お茶をいただいていますわ」

再び指を鳴らしてメイドにお茶を注がせるアンジェリカを横目に、颯太とキャロルは一時的な引越に向けて準備を始めるのだった。



颯太たちが支度を整え終える頃には、夕暮れになっていた。

用意している最中、颯太はメアとノエルに非常事態に備えてマーズナー・ファームへ一時的に移

住することになった件について説明しておく。

ノエルとメアは寂しげな顔を見せたが、それは一瞬のこと。

「ドラゴンが失踪しているのなら、仕方がないですよね……」

「事件の犯人について見当はついていいのか？」

「すまないがわからないんだ」

「ならば、我々も解決へ協力を惜しまない」

「了解だ。悪いな、こんなことになっちゃって」

颯太が頭を下げると、ノエルとメアはそれぞれの言葉で彼を励ます。

「ソータさんが謝ることじゃないですよ」

「そうだ。謝罪なら、こんな余計なトラブルを持ち込んだ犯人にしてもらわないとな」

二匹は不満ひとつ言わずに理解を示してくれた。

聞き分けのいい子たちで本当に助かると、颯太は心の中でお礼を言う。なぜ口に出さないかという、「……我々を子ども扱いしていないか？」とメアに睨まれるからである。

その後、一同は移動のために牧場前に集まった。

リンスウッド・ファーム関係者のうち、キャロルはアンジェリカと一緒に馬車へ乗り込み、颯太はイリウスの背に乗って移動を開始。メアとノエルはドラゴン形態となって上空を舞っていた。

「まさかマーズナーの家に厄介となるとはねえ」

道中、イリウスがため息交じりに言う。

ミラルダ・マーズナーと面識があるらしいイリウスは「あの偏屈親父のところか……」と露骨に嫌そうな顔をしたあと、「娘は素直だといいいけどな」と苦笑いを浮かべていた。

「それにしても、結構距離があるんだな」

「あの小高い丘を越えたら目的地はすぐだぜ……ところで、その連続ドラゴン失踪事件ってヤツは解決しそうなのか？」

同じドラゴンであるイリウスとしては、やはりそこは気になる点なのだろう。

「どうだろうな。一応、俺も調査に協力するつもりではいるけど」

「それなら問題ないんじゃないかねえか。現場を目撃しているドラゴンもいるだろうし、そいつから情報を聞き出せばいい」

「そうだな……連続失踪事件について、また何かあったら俺に連絡が来ることになっている。それまではマーズナーで待機だ」

「……まあ、たしかにあそこなら安全か」

イリウスと会話をしているうちに、話に出てきた丘を越えて柵に囲まれたマーズナー・ファームの敷地が見えてくる。

「ひ、広いな」

星が瞬き始めた夕暮れの空の下で、マーズナー・ファームの圧倒的な広さを目にした颯太は、開

いた口が塞がらなかった。

敷地内に足を踏み入れ、颯太はさらに驚く。

リンスウッド・ファームも十分広いと感じていたが、マーズナー・ファームはその比ではない。緑色のカーペットが敷き詰められたかのような広い草原では、多数の小柄なドラゴンたちがメイドたちに連れられて竜舎へと戻っていく光景が見えた。

もっと衝撃を与えたのが、住居として使用していると思われるお屋敷の外観だ。国内最大牧場の名に恥じないその豪勢さに、颯太はいよいよ思考が完全停止した。

「おい、早く行こうぜ」

「あ、ああ……」

イリウスに声をかけられて脳が再始動。先を進むアンジェリカたちを乗せた馬車を追い、大きな屋敷を目指す。

途中、武装したハルヴァ竜騎士団所属の兵と何度かすれ違った。あちこちに配備されている彼らが、颯太たちの身の安全を守るガードマンであるようだ。

豪勢な屋敷の門前にたどり着くと、すでに馬車から降りたキャロルとアンジェリカ、そして再び人間形態になったメアとノエルが颯太とイリウスを待っていた。

「遅かったですね」

「失踪事件の犯人に襲われたかと思って心配していたんですよ！」

「安心するがいい、キャロルよ。ソータを襲うような不屈き者がいたならば、私の吐息ですぐさま氷漬けにしてやる」

「メア……私たちの言葉はキャロルにわかりませんか？」

アンジェリカ、キャロル、メア、ノエルの順で、二人と二匹がそれぞれ違った反応を見せる。とりあえず、颯太はマーズナー・ファームの規模の大きさに感心して遅れてしまったと軽く謝罪しておく。そのあと、颯太たちはマーズナーの屋敷へ向かって歩きだした。

なお、イリウスには専用の竜舎が用意されているらしく、メイドたちによって別の場所に案内されることに。

イリウスは連行される直前、二匹の竜人族に向かって悔しそうに声をかける。

「メア！ ノエル！ おまえたちも竜舎で寝ろよ！」

「我らはこの姿のままでもいい。ベッドで寝たいからな」

「私もです」

「ちくしょう！ 俺も一度でいいからベッドで寝てみてえ！」

イリウスの虚しい叫びが響き渡った。キャロルとアンジェリカはその様子を心配しているようだったが、颯太から理由を聞くと二人とも「はあ」と呆れた声を出す。

「では、気を取り直して参りましょうか」

アンジェリカの案内で颯太、キャロル、メア、ノエルはマーズナーの屋敷の中へ。

「二「おかえりなさいませ、アンジェリカ様」」

すると、複数のメイドさんがお迎えしてくれた。

ハルヴァ城にいるメイドさんとは服装が若干異なり、こちらは臍脂色^{えんじ}がベースのワンピースに白のエプロンを合わせた格好になっている。

「来客用の部屋の準備はできていますわね？」

「はい。いつでも大丈夫です」

アンジェリカの問いかけに、一番近くにいたポニーテールのメイドさんが答える。

「では、早速その部屋に行きましょう。あなたたちはお茶の用意をお願いします」

「二「かしこまりました」」

息がピッタリと合った返事を残して、メイドさんたちはお茶の準備に取り掛かる。

「こ、こんなにメイドさんがいるのか」

「彼女たちは牧場の職員も兼ねていますのよ」

颯太が素直な感想を漏らすと、アンジェリカはそう補足を加えた。

万能なメイドさんだと感心しつつ、一階にある用意された部屋へ向かう。

「さあ、遠慮なさらず寛いでください。失踪事件が解決するまでの間、ここがあなたの方の家となるのですから」

そうは言うが、と颯太は戸惑いの色を隠せない。

部屋の質はリンスウッド・ファームを遥かに凌駕^{りようが}している。それどころか、地球の一流ホテルのスイートルームと見まがうような豪華さであった。あらゆる感性が庶民レベルの颯太にとっては、かえって落着けない。

続いて、アンジェリカは颯太たちの客室を案内する。

「ここはキャロルと童人族用の部屋で、あなたの部屋はすぐ隣に用意してあります」

「あ、ああ。ありがとう」

「それと、もうしばらくすると夕食ができるそうですわ」

「夕食……もうそんな時間だったな」

「準備が整い次第、こちらから声をかけますので、それまではゆっくりと体を休めてください」
至れり尽くせりの対応に、颯太とキャロルは頭を下げて礼を言う。

「何から何まですまないな」

「ありがとう、アンジェリカお姉ちゃん」

「お礼を言われるほどのことでもありませんわ」

口ではそう言いつつも、縦ロールの先を指でいじったり、目線をあちこちに動かしたりと嬉しうだった。

アンジェリカが部屋を出たあと、物珍しげに室内を見て回るキャロルとメアとノエルを眺めながら、颯太はソファに座って考えをまとめる。

ひとまずここにいれば安全だ。屋敷内には大勢のメイドさんもいるし、周辺は竜騎士団で固められている。そう易々と突破はできないだろう。仮にできたとしても、こちらにはメアとノエルという切り札がいる。それに加えて、アンジェリカによるとこの牧場には以前からハルヴァに味方する竜人族もいるというから心強い。

とはいえ、颯太の気分はまだ少し沈み気味だった。

その理由は、ドラゴンたちがいなくなった原因が不明なままであること。人間への協力の嫌気がさして逃げ出したにしては、短期間のうちにいなくなる数が多い。かといって何者かが強引に連れ出したとも考えにくい。今のところ家出説よりは可能性は高いが、そもそも行方不明になっているドラゴンの体長はイリウスとほぼ同じだという。それほど巨体のドラゴンを短時間で外へ運び出すのは至難^{むずか}の業だ。

一体……ドラゴンたちに何が起きたのか。

さまざまな思考が脳内を駆け巡り、うまくまとめられない。

今夜は眠れるかなと、はしゃぐキャロルたちを見ながら、颯太は大きく息を吐いたのだった。



颯太たちがマーズナー・ファームに到着したのとほぼ同時刻。

「一体……ここで何が起こったっていうんだ」

ハルヴァ竜騎士団リンスウッド分団を指揮するハドリー・リンスウッドは困り果てていた。

王国内のドラゴン育成牧場で起きた連続失踪事件。その真相を確かめるため、複数の分団が朝早くから各地に派遣されていた。

ハドリーが調査を担当するのはレインズ・ファームという中規模の牧場であり、すでに竜騎士たちはそれぞれの持ち場につき、警備に当たっている。

ハドリーは行方不明となったドラゴンが暮らしていた竜舎近辺を中心に、半日かけて異常がないか調査を行ったが、特にこれといって手がかりは見つからなかった。

ふと、ハドリーが視線を巡らすと、そこにはブリギッテ・サウアーズの姿がある。念のために竜医である彼女にも同行してもらったのだ。

牧場からドラゴンがいなくなるという単発的な事件は、多くはないものの過去にいくつかの報告例が存在している。その際も失踪の原因は定かでなかったため、防止策が確立されているわけでもなく、こうした案件については大体の場合がドラゴンの気まぐれか、嫌気がさしての逃亡という結論で処理されることが大半だった。

だが、今回は少々様相が異なる。

立て続けに六匹のドラゴンが行方不明となった。

これはとても見過ごせる数ではない。

それに、タイミングも悪かった。

「舞踏会を間近に控えての事件……引っかかるな」

二年に一度行われるハルヴァ舞踏会。

各国の国王や要人たちが集うその会場は常に厳戒態勢が敷かれ、あらゆる事態に備えて万全の態勢で開催される。

その舞踏会を三週間後に控えるこの時期に、連続ドラゴン失踪事件が発生。事件の真相も気になるところではあるが、目下の不安要素は舞踏会当日の警備態勢である。

これで打ち止めならまだなんとかならないでもないが、これ以上失踪が続くと例年通りの数で城を警備することは難しくなる。牧場を警護する人員を増やさざるを得ないからだ。

ただ、だからと言って各牧場に在るすべてのドラゴンを一カ所に集めることは困難なため、各牧場に竜騎士団を派遣して失踪を未然に防ぐしか対応策がないのだった。

「ブリギッテ、そっちは何かわかったか？」

先ほどからなぜか難しい顔で手元のハンカチを見つめている竜医のブリギッテに、ハドリーがたずねる。

「争った形跡はないようだし……こりゃ冗談抜きにしてただの脱走ってオチかもしれないな」

「私は違うと思います」

ハドリーが願望の混じった推測を述べたが、ブリギッテは否定した。その理由は彼女の手にして